

# 「新古今注」考

片山 享

新古今古注釈の比較的早い時期の注釈書として成立し、後続の注釈書に影響を与え、特に「新古今和歌集註」に重要な典拠注として取り込まれ、「増補本新古今集聞書」を通して近世注釈にも大きな影響を与えた「新古今注」については、まだ充分な解明がなされていない。そこで改めて「新古今注」を取り上げて考察を加えてみたい。

## 一

「新古今注」の伝本は、

第一類本 (一) 京都大学付属図書館蔵「新古今注」一冊。

(二) 静嘉堂文庫蔵「新古今和歌集註」一冊。

第二類本 (三) 京都大学付属図書館蔵「新古今集抄」一冊。

の三本が現存している。

(一)「新古今注」は、奥に、

於坂本 自上冷泉家借得之云々 環翠軒(花押)

とあり、環翠軒清原宣賢の自筆本で、その書写時期は宣賢出家の享祿二年(一五二八)以後で、「新古今注」を引

く「詞源略注」の成立は、大取一馬氏によつて、「享祿二年四月から八月二七日までの間と、天文十一年の六月から九月までの間、それに天文十二年五月からしばらく（越前一乗谷に）逗留していた間」のいずれかの時期とされ、さらに余語敏男氏が宗碩「聞書連歌」に「詞源略注」が書き入れられていることから「聞書連歌」成立は享祿二年十月二五日であるから「詞源略注」の成立は享祿二年四月から八月二七日の間と限定された。<sup>(2)</sup> そうすれば、「新古今注」の書写時期は環翠軒を称する宣賢出家の享祿二年二月十日から四月の間ということになる。

(二) 静嘉堂文庫本「新古今和歌集註」は、巻軸に本文とは別筆で、

右新古今故前亜相公栄一卿 御筆也

寛政八年正月十日 通理

とあり、小島吉雄博士によつて通理は久世通理であるから、栄一卿は久世栄通（安永九年（一七八〇）七月薨）の筆と考えられている。<sup>(3)</sup> 本書には「新古今注」の「環云……」の二個所の宣賢の注記がそのまま記されており、錯簡による本文の乱れから宣賢書写本の直接の転写ではなく、少なくとも間に一本以上の写本の介在が想定されるが、<sup>(4)</sup> ともあれ宣賢書写本の転写本である。

第二類本（三）「新古今和歌集抄」は、室町末期写。墨付五二丁、歌数六六九、「新古今注」の七四七に比べると歌数も少なく、かつ巻軸の积教部七首目の注文の途中で切れており、积教部後半を失っている残欠本である。

この第一類本「新古今注」と第二類本「新古今和歌集抄」を比べると、根本的な相異がある。その（一）「新古今注」は原則として詞書・作者名を記さず、和歌と注文だけであるが、「新古今和歌集抄」は原則的に詞書・作者名・和歌・注文を有する。（二）両本相互に独自注があり、その数は「新古今注」一三〇、「新古今和歌集抄」五三、共通歌は六一七である。（三）「新古今注」は片仮名交じり表記であるが、「新古今和歌集抄」は平仮名交じり表記である。こうして両本の間には系統を異にした大きな相異点がある。どのような成立事情によるものであろうか。

「新古今和歌集抄」(以下「集抄」と略称する) 春上第二首目「ほのぼのと」の歌注の次に、「式子内親王 高倉院御女也」と作者名と注記のみが記され、和歌および注文はない。また、

1619 吉野山やがて出じと思ふ身を花散りなばと人や特つらん 家衡朝臣

世をいとひてある吉野のおくまでも、猶うき世の秋の夕暮の心をよべば、いとひてもいとふべき物は、うき世なりとよめり。

とある。この注は次歌1620の注で、現に「新古今注」では、

1620 イトヒテモ猶イトハシキ世ナリケリ芳野ノ奥ノ秋ノ夕暮

世ヲイトヒテアル吉野ノ奥マデモ、猶ウキ世ノ秋ノ夕暮ノ心ノヲヨベバ、イトヒテモイトフベキ物ハ、ウキ世ナリトヨメリ。

とあって、「集抄」は書写の際の目移りに拠る誤写を生じたものと思われる。このことは、「集抄」の親本が新古今集の本文に注文を書き入れた書入本であることを示していると言つてよい。そうすれば、式子内親王の作者名と注記だけが記されたのは、親本に注文がなく、記す必要がなかったので、作者名注記のみを書き入れたのであろう。

一方「新古今注」でも

188 夏草ハ茂リニケレト時鳥ナド我宿ニ一声モセヌ

の「レド」以下にミセケチ記号を付け、右に「リナ玉ボコノミチユキ人モムスバカリニ」と訂正している。これも書写の際、目移りによつて189歌を記し、注を記す段階で誤りに気付いて訂正したものを見るべく、これについて黒川昌享氏は、189歌が「新古今注」にないところから「書写者宣賢が、親本を書き写す際、親本とともに新古今集の無注の完本を傍らに置いて、それを参照しながら作業を進めていた、そのために親本になく、完本では当該歌の隣に位置する歌本文を誤記してしまった」と見られているが、そうではあるまい。それは例えば、「新古

今注」は詞書を記さないが、

359 物オモハデカカル露ヤハ袖ニヲクナガメテケリナ秋ノ夕暮

物思ハデカカル露ヤハヲクト打案ジタル体也。ソレヲナガメテケリナトハ、ヨミタマヘリ。オノコドモ詩ヲ作テ哥ニアハセ侍

と注文末尾に記された「オノコドモ詩ヲ作テ哥ニアハセ侍」のミセケチの部分は次歌360の詞書「をのことも詩を作りて哥にあはせ侍しに、山路秋行といふことを」の一部を記して消したものと思われ、1398の「久シクヲトセヌ」も次歌1399の詞書「久しくをとせぬ人に」の一部、1413「女ノホカヘマカル」も次歌1414の詞書「女のほかへまかるを聞きて」の一部を誤って記し、訂正したものと思われるからである。

また、「新古今注」が本来有さない詞書について注を付けた個所がある。

163 カクテコソ見マクホシケレ万代ヲカケテニホヘル藤浪ノ花

飛香舎トハ、大内ノ御殿ノ名也。

1462 サクラ花オリテ見シニモカハラヌニチラヌバカリゾシルシ成リケル

翫新成桜花トハ造花ノ事也。サレバチラヌバカリトハヨメル也。

という前者は、「飛香舎にて藤花宴侍りけるに」の詞書の注であり、後者は、「後冷泉院御時、御前にて翫新成桜花といへる心ををのこともつかうまつりけるに」の詞書に関する注である。これらの事象はすべて両本の祖本が新古今集本文を備えた書き入れ本であったことを示唆するもので、両本は同一祖本から別々に抄出された抄出本であったと考えられるのである。

ところで、両本を読み比べてみると、「新古今注」に誤写が多いことが認められる。それは、「新古今注」を主要典拠とした取り合わせ注「新古今和歌集註」本文との比較によってある程度明らかにすることが出来ると思われる。例えば、

1436 年クレシ涙ノツララトケニケリ苔ノ袖ニモ春ヤ立ラン

苔ノ袖トハ、沙門ノ袖也。発心同事也。

〈集抄〉苔の袖とは、沙門の袖也。羅衣同事也。

〈集註〉苔の袖とは、沙門の袖なるべし。羅衣と云もおなじ事也。

とあって、「集註」はやや書き換えているが、「集抄」が原形で、「新古今注」は誤写と思われる。

1190 庭ニオフルタカゲ草ノ下露ヤ暮ラマツマノ涙ナルラン

タカゲ草オフライヌトハナシ。タダ草也。

〈集抄〉タカゲ草なにをいふとはなし。ただ草也。

〈集註〉タカゲ草とは、ゆふべの草まで也。草の名にあらず。

「新古今注」は意味不明という外ない。「新古今集註」は「十代拔書」の注である。「集抄」が原形であろう。

9 時ハ今ハ春ニナリヌトミ雪フル遠キ山ベニ霞タナビク

此哥ハ、時ハ今ハ春ニ成リヌトヨミキリテ、遠キ山辺ニ霞タナビキ、春ハキニケリトミルベシ。

〈集抄〉ときは今春に成ぬとみ雪ふる遠き山べに霞たなびく

此哥は、時は今春に成ぬとみ雪よみ切て、遠き山べに霞たなびくと云句へかけてみるべし。

〈集註〉時は今春に成ぬとみゆきふる遠き山べにかすみたなびく

此哥は、時は今春に成ぬと読みきりて、とをき山辺にかすみたな引と云ふ句にかけてみるべし。

この例は多くの問題を含んでいる。「時ハ今ハ」と「時は今」は本文の問題である。「新古今集」本文は「時は今は」であるが、小宮本などのように「時は今」となっている本文もある。原形はどうだったのであろうか。例えば、

1022 カタ岡ノ雪マニネザス若草ノホノカニミシ人ゾ恋シキ

〈集抄〉みてし〈集註〉みてし

1204 君マツトネヤヘモ入ラヌハキノ戸ニイタクナフケソ山ノハノ月

〈集抄〉真木の戸〈集註〉真木の戸

1247 今コントタノメツツワガコトノ葉ゾトキハニミユル紅葉成ケル

〈集抄〉ふる〈集註〉ふる

などのごとく明らかに「新古今注」の誤りとみられる個所が数十個所あることからみればあるいは「時は今」であった可能性がある。注文の「新古今注」「遠き山辺ニ霞タナビキ春ハキニケリトミルベシ」は誤りで、同様に「集抄」の「時は今春に成ぬとみ雪よみ切て」とするのも誤りであって、「集註」が原形を示しているのではないかと思われる。「新古今注」注文に誤写と思われる個所が多い状況を今少し掲げてみると、

(新古今注)

187

逗留セデミル

(集抄)

(かへる)

(集註)

(やすらはでかへる)

737

詞ノホトリ也

(おこり)

(おこり)

1 9 0 9	1 8 4 2	1 7 8 2	1 6 7 6	1 6 4 8	1 6 4 7	1 6 4 4	1 5 8 2	1 4 5 5	1 4 5 4	1 4 5 3	1 3 7 3	1 3 2 8	1 3 2 5		1 2 4 5	9 0 7
塩ヤノワナト申ハ	イトマホシナド	釈教ノ庭ニアラネバ	中ニ、異相ナド	右大臣ニナリテ	大将ヲハナレ	彼川ニ取テ	今ミルトイフ	木ノ雪ニヨソヘテ	花ヲ見、叡覽アル	二条関白殿ノ連子	万代ヲヌル宿	忘ラレシ時	心ノ老トハ	誰カゲヲモタノミテ	浅キワガ身	サヤノ中山ハ遠国也
(王子)	(いはまほし)	(部)	(中道実相)	(そはとは)	(今年右大臣)	(去年大将)	(よせて)	(雪におるるに)	(君)	(連枝)	(ふる)	(恋)	(花)	(かた)	(浅き心)	(遠江国)
(王子)	(いはまほし)	(部)	(中道実相)	(そはとは)	(今年左大臣)	(去年大将)	(よせて)	(雪におるるに)	(君)	(連枝)	(ふる)	(恋)	(花)	(かた)	(いやしき)	(心のあさき)

等は「新古今注」の誤写と認めてよいと思われる。「新古今注」には一・三・四字（まれにそれ以上の字数）の空白部分が四十数個所ある。これについて、黒川昌享氏は「恐らく京大本の親本（上冷泉家本）に、すでに虫損が起つていて、それを忠実に反映させた結果生じた空白部分ではないかと考えられる。」<sup>(4)</sup>という重大な指摘がなされている。碩学清原宣賢が上冷泉家から借り受けた「新古今注」親本が、誤り多き本であることに気付かなかつた筈はない。しかし、古鈔本としての「新古今注」の価値を認めた結果採った方法が、一字一句違えず写し、それ故に虫損による欠落個所も空白のまま残す厳密な書写態度であつたと考えられるのである。

「新古今注」に対して「新古今集抄」の本文はどうであらうか。形態的に本書は、詞書・作者名・和歌・注文の順で記されているが、711・724・747・748・1433・1831は、和歌を欠き、注が次歌の次に次歌の注と合わせて記されている。また、1416・1451・1639は、和歌のみで注がない。「新古今注」では、549・721・1016・1424・1549・1963が和歌のみで注がない。ただし、右の内1451は、「新古今注」には注があり、1424には「集抄」に注があるので、相互の注が書き落とされたものである。「新古今注」の合点を付した四首は転写の過程で歌のみであることを示す記号として合点が付されたものであらう。特に優れた歌の意識は感じられないからである。

1334 ふりにける時雨は袖に秋かけていひしばかりを待とせしに 俊成卿女

秋かけていひしばかりを待とせしにえにこそ有けれと云哥をとれり。秋あはんと契りたれば、さばなくて時雨こそ袖にふれとよめり。

注の「秋かけていひしばかりを待とせしに」の歌は「えにこそ有けれと云哥をとれり。」の意とも取れなくもないが、苦しい。やはり「新古今注」や「集註」が引く本歌「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそ有けれ」の誤写とみるべきであらう。こうして「集抄」にも誤写とみられる個所もあるが、「新古今注」に



部 立	新 古 今 注			新 古 今 集 抄			共通歌数
	歌数	独自	集註	歌数	独自	集註	
春 上 下	34			37	3	1	34
	14	1		19	6		13
夏	43	5	4	39	1		38
秋 上 下	58	28	8	31	1		30
	13	9	1	5	1		4
冬	15	8	3	10	3		7
賀	20	7	4	13			13
哀 傷	5	3		2			2
離 別	1			2	1		1
羈 旅	24	7	4	19	2		17
恋 一 二 三 四 五	31	2		33	4	2	29
	15			16	1		15
	31	1	1	35	5	4	30
	53			58	5	1	53
	58			61	5	1	57
雑 上 中 下	84	4	1	89	9	2	80
	58	1	1	61	4	2	57
	89			91	2		89
神 祇	52	11	1	41			41
釈 教	49	42	5	7			7
計	747	130	63	669	53	13	617

比べると、本文や注文の誤りは比較的少ないと言える。

しかし、両本とも不完全な抄出本であり、原初本の出現が待たれるのである。

ところが、「新古今和歌集註」作者は<sup>5)</sup>この原初本を見ているらしいのである。「新古今注」に独自注一三〇首、

「集抄」に独自注五三首があると云ったが、その状況と「集註」の関係を一覧にして示すと、次表のごとくである。

左表によっても明らかのように「新古今注」の独自注一三〇の内六三首、「集抄」の独自注五三の内一三首が「集註」に取られているのであるから、このことは「集註」が現行の「新古今注」と「集抄」拠ったとしなにかぎり成

り立たないことで、それは不自然であり、抄出本ではない原初本に拠ったものと思われる。ただし、原初本がどのような規模の注釈本であったかは明確に把握することは出来ない

## 三

そこで、現存する両抄出本「新古今注」「集抄」から可能な限り原初本を想定し、その性格を考えてみたい。注内容を(1)語句の解釈、(2)詠歌事情、(3)歌の趣旨や鑑賞に関わる注、(4)本歌・本説・参考歌、(5)修辞・秀句、(6)名所・歌枕、(7)故事・有職に関する注、(8)清濁・句切れなどの指摘と大別して一覧してみる。

	1	2	3	4	5	6	7	8
春 上下	29 14		2 1	2 1	2 2	9 4	1 3	2
夏	36		2	6	1	5	2	
秋 上下	48 13		5	8 1	1 1	6		
冬	16			3				
賀	12			1	1	1	7	
哀 傷	4						1	
離 別	1					1		
羈 旅	15			5		7	2	1
恋 一二三四五	26 11 31 38 47			1 6 1 8 5	1 1 2	4 2 2 11	3 2	1
雑 上中下	59 43 56	2 2 19	5 28 15	5 3 2	2 5 2	7 12 4	3 5 8	3
神 祇	26	1	9		1	3	39	
釈 教	9		4				2	
計	534	31	116	58	25	78	78	7

従つて二以上の項目にまたがる場合もあり、注歌数とは一致しない。

(一) の語句の解釈に関する注が最も多く、本書の性格を示していると言えよう。例えば、

8 風マゼニ雪ハフリツツシカスガニ霞タナビキ春ハ来ニケリ

風マゼトハ、風ト雪トノマジリ行タル事ヲイフ也。シカスガハサスガニトイフ事ナリ。(「集抄」「行」なし)  
のごとく、穏当な注も多いが、

10 春日野ノ下モエワタル草ノ上ニツレナクミユル春ノアハ雪

ツレナクトハ、タナビクナドイフ事也。ツレトハ友ト云事也。(「集抄」同文)

と言つた誤りと思われる解釈もまゝある。

注目されるのは、制詞についての注で、

73 春風の霞吹とくたえ間より乱てなびく青柳のいと 殷富門院大輔

みだれてなびく、制のことば也。読べからず。(「集抄」)

を初めとして、82 「花のやどかせ」(注・集抄)、129 「嵐ぞかすむ」(集抄)、133 「嵐もしろき」(集抄)、147 「むなしき枝」(集抄)、159 「露そふ」(集抄)、170 「み山べの里」(集抄)、220 「あやめぞかはる」(集抄)、263 「涼しくくもる」(注・集抄) などが指摘されている。「詠歌一体」を受けたものであろうが、「嵐もしろき」「み山べの里」は「詠歌一体」にはない。一体制詞は、為家以後次第に拡大して行つたらしく「近代風体」(良基)では、「近代おほく禁制の詞ありといへども、いまだ其出所不分明。或定家卿、為家卿の一向可止之由被申たるもあるべし。或は又あまりによきこと葉にてある間人ごとに是を用るが故に被止たるもあるにや。今所見に随而少々これを注し出す。用捨宜く人の所存にあるべし。(後略)」と言つていて、「一向不可用詞」として挙げた中に「深山邊の里」が入っている。「嵐もしろき」は注作者の制詞とするところだったのであるかも知れない。いず

れにしても、制詞の問題は、注作者の属した時代性を示している。

(2) については例えば、

1506 和歌ノ浦ニ家ノ風コソナケレドモ浪吹色ハ月ニミエケリ

家ノ風トイフ程ノ事ハナケレドモ、人ナミニモ和哥所ニ侍リテ、コトノ葉ノ月ニミエ侍ル事ノ思出サヨト述懐ノ心ヲヨミ侍ル也。(集抄、和哥所↓和哥)

など、詠歌事情に関する注が三一あり、これは、雑部・神祇部に集中的に現れている。また(3)では、

1315 草枕ムスビ定メン方シラズ習ハヌ野ベノ夢ノ通路

ナラハヌ野ベノカリネナレバ、イヅクニムスベル夢ノ通路ハアルベキト、草ノ枕ヲモムスビ煩タルナリ。(桑抄、ムスベル↓むすびてか)

など、歌の趣旨や鑑賞には関する注が一六あり、(一)(二)(三)を加えると、全体の73%に及び、本音の性格を示すものとなっている。

(4) 本歌・本説の指摘は五八歌にみられる。巻頭歌を取り上げてみる。

1 三吉野ハ山モカスミテ白雪ノフリニシ里ニ春ハ来ニケリ

拾遺集二、春立トイフバカリニヤ三吉野ノ山モカスミテケサハミユラントイフ哥ヲ本歌トシテヨミ給ヘリ。古郷トイフ事ハ、昔大和二都ノタチタレバイフ也。吉野ノ里則古郷也。吉野ニ御垣ガ原ト云所アリ。ソレモ内裏ノ御垣ノウチナリシガ、今ハ原ニ成リタレバ、御垣ガ原トイフ也。(集抄、山モカスミテケサハミユラン↓なし)

と本歌を指摘し、(6)とした吉野の御垣が原を傍証として吉野古京説を強調している。この歌の本歌への言及は、はやく俊成の建久九年「後京極殿御自歌合」一番判詞に、「忠岑がいふばかりにやみよし野のといへる歌は、

山もかすみてといへるもの字、ことに心こもりておぼえ侍しに、今又やまも霞とと待るに、年来の所存に計会して両方勝負不分明。なぞらへて持と申べきにや。」とあるのに始まるが、注釈史での指摘は意外に遅い。自讃歌注常縁「月花集拾遺」が、

此山南国にて陽気早くいたれる故に、春の立事をよみならはせりとかや。拾遺集の巻頭にも、春立といふ斗にや御吉野の山も霞でけさはみゆらん。

と述べているが、本歌取としてではなく、吉野立春の類歌としてであつたようで、「原撰本新古今集聞書」では、本歌に、

いづくとも春の光はわかなくにまだみよしの山は雪ふる  
みよしの山の山の白雪つもるらし古郷さむく成まさる也

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲けり  
を掲げている。宗祇「自讃歌註」が、

此哥は、春立つといふばかりにやのうたをとれり。山もかすみてといへるめでたきにや。ふりにし里とは、古郷のよしなり。

と俊成の指摘を踏まえて本歌としているのが早く、新古今注釈書では、「久世本新古今聞書」が本歌に「春立といふ斗にや」と「故郷は吉のの山し近ければ」を引いているのみで、幽齋「増補本新古今集聞書」は常緑注に拠つていて、忠岑歌の指摘はなく、「増抄」も同様で、漸く「八代集抄」に到つて、

師説此哥忠岑の山も霞てを本哥ニテ読ながら古にし里にてももの字をはたらかし給。奇特云々。

によつて定着しはじめるのである。こうしてみれば、「新古今注」の本歌忠岑歌の指摘は最も早いものであつたと言えるのである。

本書の本歌・本説・参考歌に関する関心は後続の注釈書に比べて高く、(5) 修辭・秀句、(6) 名所・歌枕、(7) 故事・有職、(8) 清濁、句切に関する指摘と相俟ち、本注作者が専門歌人であったことを思わせるに充分である。

#### 四

本注作者は、歌学書にも通じていたようである。

1876 神風やとよみてぐらになびくしでかけてあふぐといふもかしこし

神風といふ事以前もあれども、此下にて申也。或説に、みもすそ川に神が瀬と云在所と云々。是をば不用。風のいづくをもへだてぬがごとく、神慮のあまねきことを神風とはよむと云々。とよとは大と云儀也。とよはゆたかなる也。とよはた雲と云も大なる雲也。豊あし原と云も大の儀也。みてぐらとは、神にたてまつる神物と云也。しても神の物なれば、とよみてぐらになびくしではつづけ給へり。かしこしとは、かたじけなしとおそれたる詞也。(新古今注は、へだてぬ↓へダテヌル)

「神風」については、「能因歌枕」以来の諸歌学書にみえるが、影響を受けたと思われる「奥儀抄」を掲げる。

かみ風やうやうに申しあひたり。あるはみもすそ川に神風といふ瀬あり。大神宮のあまくだり給へる所也と申す、心得ず。扱はみもすそ川とつづけざらむはかはよむべからず。あるは神のめぐみをいふ也と申す。それ又いかがときこゆ。此義にてよめるにや。(後略)

「袖中抄」はそれまでの所説を要約して、

綺語抄、神風トハ神ノオムメグミヲ云也。通宗朝臣筑紫ノ安樂寺ニテ神風トヨミタリケルヲ、人ワラヒケリ。

伊勢太神ノ御事ナラズハヨムマジキニヤ。可尋也。能因歌枕ニモ、神風トハ伊勢ライフト云々。奥儀云、神風様々ニモ申合タリ。或ハミモスソ河ニ神ガ瀬ト云瀬アリ。太神宮ノアマクダリ給ヘル所ナドマウス。心エズ。サテハミモスソ河トツツケザラム外ハヨムベカラズ。或ハ神ノメグミライフナリトマウス。其又イカガトキコユ。(後略)

と記している。「奥儀抄」の「神風といふ瀬」は後に「神が瀬」と呼ばれ、「袖中抄」所引の「奥儀抄」では「みもすそ河に神が瀬と云瀬あり」となっている。「新古今注」は「神が瀬」説を否定し、「奥儀抄」が「神のめぐみ」説について「それ又いかがときこゆ」と疑念を呈しつつも「此義にてよめるにや」と言い、「新古今注」は、神のめぐみ説に立つて、風とあるのに拘わり、「風のいづくをもへだてぬごとく、神慮のあまねきことを神風とはよむと云々」と言う。「云々」とあるところからみると、注作者自身の釈と言うよりも、先人の説に拠ったかと思われるが、その典拠は明らかでない。

また「和漢朗詠集」注の影響もある。

1672 ヲノエノ朽シ昔ハ遠ケレドアリシニモアラヌ世ヲモフルカナ

ヲノエノ朽シ昔ハトハ、王質トイフモノ木ヲコリニ商山トイフ山へ入ケルニ、二人童子ノ碁ヲウツヲ見テ、ワヅカニ半日ト思ヘバ、手ニモチタルヲノエ朽タリ。オドロキテ我方ヘカヘレバ、七世ノ孫ニアヒタリ。其アヒダ六百年ヲヘタリトイヘリ。其ノヲノエ朽シ事ヲ、昔ナレドモ今モ本ミシ事ノアラズ成タルハ、サナガヲ昔ノゴトシト、述懐ノ心ニヨミ給ヘリ。

王質の斧の柄の朽ちた話は、晋書、述異記、東陽記、郡国志に見え、国書でも古今集注釈書や奥儀抄、和歌色葉、綺語抄などに見えるが、細部にわたって同じ話は少ない。<sup>6)</sup>この注の要点は、主人公「王質」、場所「商山」、人物「二人童子」、事柄「囲碁」、時間「半日」、結果「斧柄爛」、結末「七代孫」であるが、この話に最も近いのは、「和

漢朗詠集」永濟注である。

謬入仙家雖為半日之客、恐婦旧里纔逢七余人之孫 落花乱舞衣序 後江相公

此ハ詩ノ序也。二条院ニシテ、文会ハベリケルニ、朝綱、其日ノ序者ニテ作る也。此ハ題ノ心ニハアラス。吾身ノ述懷ナルベシ。其時地下ニテメサレタリケルニヤ、タマタマ竜顔ニチカヅクラモテ、仙家ニ入テ、半日ノ客タルニ、タトフル也。半日客トイフハ本文也。晋ノ元帝ノ時、王質ト云者、斧ヲコシニハサミテ、山ニイリヌ。山ノナカニ、フタリノワラハ囲碁ヲウチテキタリケレバ、王質ヲノヨヒザノシタニシキテ、シバラクミヤタルホドニ、日クレガタニナリケレバ、オドロキテカヘラムトスルニ、コノオノエクチタリケレバ、アヤシミヲドロキテ、タキギヲキラズシテ、家ニカヘリヌ。ミレバ、トコロハソレナガラ、アリサマミナカハレリ。人ニトヘドモ、シレルモノナシ。人アリテ、ツゲテ云ク、ワレツタヘキク、ワガ先祖ニ山ニ入テカヘラザリケル人アリケリ。キミモシ其人歟。ヨクタツヌレバ、七代ノムマゴニナシアリケル。晋書ニミエタリ。此本文、或ハ武陵桃源ノ事也トモイヘリ。可尋也。

とある。ここで注目すべきは、朝綱の詩句「半日之客」の説明に「半日客トハ本文也」として、王質の故事を引いて「日クレガタニナリケレバ」と言っている。「新古今注」の「半日」はここから出たものと思われる。と言うのは時間に関しての記述は他書になく、僅かに六卷抄、奥儀抄、和歌色葉などに「囲碁一番」の間とするのであって、「半日」というのは朝綱詩句の永濟注の解からで、以後、和漢朗詠集注では「半日計過テ我家ニ還タレバ」（和漢朗詠集和談鈔）のように「半日」が定着してくるからである。新古今注の永濟注の相異は、「商山」であるが、これは新古今注が四皓が秦の虐政を避けて商山に隱遁した故事に因んで、仙境を強調する為に商山としたものと思われる。こうして「新古今注」の王質の故事は、鎌倉初期成立とされる「永濟注」に拠るものと思われる。

また、古今集古注釈書の影響もあると思われるふしがある。



2 ホノボノト春コソ空ニ来ニケラシ天ノカグ山霞タナビク

此御哥ハ、初五文字ヲ下句ノカシラニヨキテミルベシ。天ノカグ山ハ伊勢ノ国ニアリ。天ノ戸ノ明ハジメシモ、此山ヨリノ事ナレバ、春ノ始ノ御哥ニノセラレタル也。(集抄は、伊勢に傍線を付し、大和と小書きする。)

右の注で、まず奇異に感じられるのは、「天ノカグ山ハ伊勢ノ国ニアリ」である。何故このような荒唐無稽な注が出て来たのか。原因は「古今集序聞書」(三流抄)の説話と関係がありそうである。

天地開ケ始リシヨリ起ルト云ハ、必ズ伊弉諾尊ノ事ニハ非ズ。是ハ天照太神国土ヲ司リ給ヒシ時、素盞烏尊、惡神魔太羅神及一千ノ惡神ヲ語ラヒテ、大和国宇多野ニ城廓ヲ構ヘテ八箇ノ劔ヲ一千掘立テ、軍ヲ發シ玉フ。太神、大慈大悲ヲ以テ思シメス様、軍ヲセバ、定テ神多ク亡ヌベキ故ニ由無シトテ月神・手力雄命・氣永足杵司安閑玉由理姫命、此人々ヲ始トシテ八百万ノ神達ヲ率キテ、大和国葛城山天間原天ノ岩戸ニ閉籠リ玉フ。(中略)彼鏡ヲ櫛ノ枝ニ付テ神等ウタヒ舞ヒケリ。今ノ催馬樂是也。此声ホノカニ岩戸ニ聞ヘケレバ、日神吾ヲ恋ル神ノ有ヤトテ手力雄ノ神岩戸ヲ開カセタマフ。此時日神、岩戸ヨリ御顔ヲ指出シ玉フ。御光カガヤキテ御兒白クミエサセ玉ヒケルヲ、アナ面白ヤトノ玉フ。是ヨリ興アル事ニハ面白ヤト云也。此時日神岩戸ヲ出玉フ。香久山ニ影向アリ。是ニ始テ国土開テ国明ニナル。去レバ此時、天地開ケ始シ時ト云也。<sup>(8)</sup>

この注では、天地開闢を天の岩戸説話と結び、その場所を大和国葛城山とし、岩戸から出られた天照太神が影向されたのが、天の香久山だと言うのである。それがなぜ「伊勢国」となったのか。おそらく「奥儀抄」の「神風」の項の後半部に日本書紀を引いて、

故に大神の教へのまにまに、そのまつりごとをいせの国にたつ。よりて斎宮を五十鈴河の上に興す。これはいそのみよと云ふ。すなはち、天照大神はじめてあめよりくだり給ふ所也と云へり。是より申す事にてこそ。

という伝承と結んだものではなからうか。ただし、常識とは異なるものであったから伝写した「集抄」では「大和」と傍注を加えるのである。もつとも注内容からみて、「古今集序聞書」（三流抄）から直接というよりも、毘沙門堂「古今集注」や「三流抄」など説話的注釈がひろく行われて、それを受けて「天ノ戸ノ明ハジメモ、此山ヨリノ事ナレバ」と注したとも考えられる。説話的注釈と言えは、「齋院トハ、カモノ宮ノ后ニスハリ給フ事也」（182）という注にもこの傾向が指摘出来よう。

今一つ注目すべきは万葉集古注釈書に拠っていることである。

113 コノホドハシルモシラヌモ玉ボコノ行カフ袖ハ花ノ香ゾスル

玉ボコトハ、ミチトイハントテノ枕詞也。伊ザナギ、伊ザナミ尊、天ノサカホコニテ、大海ヲサグリ給ヒシ時、ホコノシタタリコリテ、此国ハナリテ、万ノ道モ次第二出来シ事、サカホコノユヘナレバ、道トイフ枕コトバニ玉ボコトハヤケリ。此哥ニ、玉ボコノ行カフトヨメルモ道ノ心也。

とあつて、いざなぎ・いざなみの神が天のさか鉾で大海を探り、その鉾の滴りが凝つて島となったという国土創生神話から「万の道も次第に出来し事さかはこのゆへなれば」という理由から「玉鉾の」が「道」の枕詞となったと説明している。これは、万葉集注釈書である「詞林采葉抄」第七、「玉鉾道」の、

（前略）今考之云、日本紀第一曰、伊弉諾伊弉冊尊立於天野橋之上、共計曰、底下豈無国歟、迺以天之瓊（玉也。此ニハ云奴）矛指下探之、是獲滄溟。其矛鉾滴瀝之潮島。名之磯馭廬島。於是降君彼島。因欲共夫婦產生洲国。便以磯馭島為国中之柱矣。右瓊矛是玉鉾也。則天地人之始也。仍王臣道々タルコト以矛為始。故ニ玉梓ノ道申焉。<sup>9</sup>

に拠ると思われ、「仍つて王臣の道の道たること矛を以つて始と為す。故に玉鉾の道と申す也。」というのが、その根拠となつていられると思われる。

前に掲げた、

1190 庭におふる夕かげ草の下露や暮をまつまの涙なるらん

道経

夕かげ草なにをいふとはなし。ただ草也。

という注も、同抄・第九「暮陰草」

当集第四卷歌曰、

我ヤドノユフカゲ草ノシラ露ノケヌガニモトナオモホユルカモ

註尺云、暮陰草未勘云々。今試考之、ナニノ陰トハイハザレドモ、夕陰トヨメル歌、当集第十卷詠蟬歌曰、

夕陰ニキナク日グラシココダクモコトニキケトアカヌコエカモ

此歌ハ只夕陰ノ草ト見ヘタリ。(下略)

に拠ったものと思われる。

百首哥中に

式子内親王

1153 逢ことをけふ松が枝のたむけぐさいくよしほるる袖とかはしる

手向草とは、木にかかりたる猿をがせといふながき苔也。

1588 白浪ノ浜松ガエノタムケ草イク代マデニカ年ノヘヌラン

手向草トハ、松ノ枝ナドニナガクサガリタル苔也。世俗ニハサルヲガセトイフ也。

古今ノ大事也。可秘云々。(集抄、可秘云々↓可秘々々)

などの「手向草」については、大西美穂さんが指摘したごとく、仙覚「万葉集註釈」(仙覚抄)第一に拠っている。<sup>(10)</sup>

仙覚は、「タムケクサトハ、神ニタテマツレルモノ也。神ニタテマツルモノヲ、松ノ枝ニカケヲキタレハ、浜松

ガエノタムケグサトヨメル也トイフ也。此義常ノ事也。アシカラズ。」とし通説を肯定した上で、

常陸国風土記ニ、香島郡ノ旧聞異事ヲ注ストコロニ、海上安是之嬢子歌ニ曰、伊夜是留乃阿是乃古麻都尔由布  
悉弓々和乎布利彌由母阿是古志麻波母云々。是ハ、ハマツガエノタムケグサトヨメラン、オナジコトトキコエ  
タリ。シカルヲ古老ノ口傳ニ、ハママツガエノタムケグサトイフハ、女蘿ヲイフナリ。サレバコソ古松ニ女蘿  
ノカカリタルヲ詠ズトミテ、ハママツガエノタムケグサイクヨマデニカトシノヘヌラントイヘルハ、コトハリ  
アヒカナヒテ、キコユル事ナレト申也。シカルヲ是ヲキキテ、ウタガヒナスヒトノイハク、コトハリハマコト  
ニアヒカナヒテキコユ。タダシ女蘿ヲバ、マツノコケトモ、ヒカゲカヅラトモイヘルコトハミエハベリ。タム  
ケグサトイヘル証拠アルニヤトタヅヌル事也。誠ニ証拠ハ分明ニ注出タルモノ未見及之。然而此義古老ノ伝説  
也。道理アヒカナヒタルハサモヤトキコユ。無文有義智者用之ノコトハリ、一旦ニ難棄置歟。今又以和語之趣  
案之、タムケトイヘルハ、タハ手ノ義、ムハ高キ義、ケハ毛髪ノ義也。然レバカノ女蘿、テナガクシテ、タカ  
キ木枝ニカカルトキコエタリ。故和手向草コト相諧和語歟。古今ノ物名ノ所ニ、サガリゴケトヨメル、即コレ  
ナルヲヤ。(後略)<sup>11)</sup>

と言ひ、古老の口伝として、女蘿説を紹介し、メゴケを松の苔とも日蔭のかづらとも云うが、手向草と云つた証拠  
はないが、道理に叶っていると肯定し、「古今ノ物名ノ所ニサガリコケトヨメル、即コレナルヲヤ」とする。  
由阿は「仙覚抄」の「さがりこけ」説を採り、

此手向草ハ松ノ枝ニ懸タルサガリ苔ト見エタリ。サガリ苔ト云フニアリ。サカリ、サガリ也。一ハシヅガカ  
セニ懸ルウミヲノ如シ。一ハ女蘿トテツタノ如ニテカカリタル物也。毛詩曰、有誕蘿毛丘葛矣。木ノ本ヨリス  
エニトヲザカリ行テ懸レル也云々。凡ソ神ニタテマツル物ヲバ手向草ト可申ニヤ。

と、サカリゴケ、サガリゴケの二種とするが、「凡ソ神ニタテマツル物ヲバ手向草ト可申ベキニヤ。」と言ひ、さら

に卷一三の長歌をあげて、「此手向草毛関守ル神ニクサグサノ物トリヲキテ奉ルヲ申ト見エタリ。以之可知之。」と述べ、結局は特定の植物とは考えていない。本注作者は、由阿の説を捨てて仙覚の言う古老説を探り、「手向草とは、木にかかりたる猿をがせといふながき苔也。」とする。歌人である注作者には仙覚の「古今ノ物名ノ所ニ、サガリコケトヨメル、即コレナルヤ」と言う言説が大きく響いたと思われる。最近影印された「毘沙門堂古今集注」にも「此ニ多義アリ。一ニハサルヲガセト云者アリ。ヒカゲ草此也。」云々とある。注作者が毘沙門堂古今集注に拠ったか否かは不明だが、「名義抄」にも「松蘿マツノコケ、一ニサガリコケ、又サルヲガセ」とあり、「手向草トハ、松ノ枝ナドニナガクサガリタル苔也。世俗ニハサルヲガセトイフ也。古今ノ大事也。可秘云々。」とあるところから、或いは家説の古今注に拠ったものであるかも知れない。

「新古今注」を書写した清原宣賢は、「詞源略注」には「新古今注」を採らず、「詞林采葉抄」を引いているが、宗祇注と云われる「詞字抄」も「莓といふともいへり。又一説手向物をいふ事、常の儀也。」と仙覚抄説を認め、連歌師長珊「新古今和歌集抄出聞書」にも「たむけ草苔の事也。」とし、牧野文庫本「新古今集聞書」も「手向草は蕨の事也。松にひかれて昔迄もいく世経ぬらんと成り。」とするが、注目すべきは、青木賢豪氏が冷泉家流の人物による講釈とされた内閣文庫本「新古今和歌集書入本」に「手向草は松のこけ也。」とあることで、松の苔説は冷泉家の家の説となっていたと思われることである。「新古今和歌集註」は「新古今注」と牧野文庫本「新古今集聞書」を合わせて「此手向草は松の枝にながさがりたる苔なるべし。松にひかれていく世へぬらんと成り。」とし、「増補本新古今集聞書」に入れられて、「増抄」や「八代集抄」にも引かれる。しかし、磐斎も季吟も疑問を持つたようで、「増抄」は「この手向草の事、種々の説あり。口伝あり。可尋之」と言い、「八代集抄」は、「野州云」として「増補本聞書」を引いた上で、「愚案、一条禅閣御説前二注。此哥万葉一に有り。」とし、1153歌注には「一条殿の哥林良材に云、手向草ハ只手向といはんと也。松をも結び、又時にしたがつて花紅葉をも行て手向るを

云也。」と兼良説を引いて正すまで、松の苔説は影響を及ぼすのである。

## 五

こうして本書には、平安期歌字書は勿論、鎌倉初期に成立したとされる「和漢朗詠集永洛注」や文永八年（一二六九）成立の仙覚「万葉集註釈」、弘安末年（一二八七ごろ）とされる「古今集序聞書」（三流抄）や由阿「詞林采葉抄」など鎌倉・南北朝期の注釈の影響が見られるのであるが、その成立や作者をどう考えたらよいのであろうか。

一つの手懸かりとして、百人一首注がある。本書、

1915 川ヤシロシノニヲリハヘホス衣イカニホセバカナヌカヒザラン

シノトハ、常ニトイフ事也。川社衣ホスナドイフ。百人一首ノ歌ノ時ニクハシク注華。（後略）

とあるごとく、本書作者はこれより先に百人一首注を書いていた。これに符節を合わせたかのごとき百人一首注がある。<sup>13</sup>すなわち、中院本「百人一首聞書」<sup>14</sup>に、

／＼春過て夏来にけらし白妙の衣はすてふあまのかぐ山

此歌は／＼春過て夏来にけらしといへるおんでもなきやうに聞えたる間知ぬ人は左様に可し思也。更衣のうた也。／＼衣かはかす天のかく山と云本も在之也。／＼天ノかく山とはいかにも極めて高山の事を云也。心ノ中は春ト先思てあればいつの間にさて夏はきにけるぞとみる也。白妙ノ衣を着スルとは更衣ノ事也。／＼衣かはかすといふ時はかはく心にみる也。天神と云は人の罪の実否糾す神也。衣をほすに其衣ノひるは咎のなき也。干ぬは咎のある□也。／＼川社篠ニ折はへほす衣いかにほせばか七日干ざらんと云うた此事也。／＼白妙の衣とは雲ノ成

也。しろ妙を花と云説在之。惡説也。春過て夏きにけらし。次第くゝに謂延べたる所面白也。二月既破三月□来と杜詩モ作也。光陰ノ事也。万葉ニハ衣さらせり天の香久山とある也。此歌を取て定家卿白妙ノ衣ホスてふ夏ノ来て垣根モたはにさける卯花大井川かはらぬ井関をのれさへ夏来にけりと衣ほす也 此歌は井せきにかかる浪を衣と云り。

とあるもので、確かに照応しているといつてよい。この本は奥に、「右此三部者称名院殿御講釈聞留分記之者也。永祿三年四月下旬書之。又其以後大納言実枝聞合之也桑門泛梗」の識語をもつ江戸初期写本で、三条西公条の百人一首講釈の聞書に実枝が補注を加えたものであつて、幽斎「百人一首注」に影響を与えた事が明らかにされており、このことから「新古今注」を同一作者注とみることは、「新古今和歌集註」に中院通勝の関与を認め、かつ幽斎自身が「新古今和歌増補本聞書」の奥書に「雖似有其恐所記非尽意之僻案、是以惠雲院殿近衛太閤三光院殿三条西前内府等之御説述卑詞者也。」として近衛植家や三条西実枝等の師説によつて述べたものだという点からも蓋然性は高いといふべきであらう。しかし、果たして「新古今注」は三条西公条の講釈であらうか。中院本「百人一首聞書」現行本識語は永祿三年（1560）公条最晩年七四歳の時のものである。勿論この時が百人一首講釈の最初であつたかどうかは不明で、これ以前講釈がなされたことも充分考えられるが、それにしても宣賢「新古今注」書写の享祿二年（1529）から三二年後のことである。公条は享祿二年以前に新古今集や百人一首の講説を行ったかどうか。公条は文明一九年（1487）生まれ、父実隆の庇護と薫陶をうけて学問に精進し、大永三年（1523）（37歳）には建仁寺に史記の講筵に赴き、八月には宣賢から卜筮を伝授され、翌四年正月には宣賢父子の援助によつて漢書列伝の点を付けている。また大永七年十月宣賢から易を学び、享祿二年十月から十一月にかけて宣賢は礼記を講じ、終了した十一月十八日公条は太刀を贈つて謝意を表している。享祿二年二月から同三年十二月まで伏見宮邦高親王に蒙求を講じているのはその成果であらうか。こうして公条はこの時期漢籍学習に務めた時代であつて、その

多くを宣賢に負っている。一方、和歌・物語については、父実隆の薫陶をえて大永三年三月ごろから知仁親王や伏見宮邦高親王に源氏物語を講じ、大永五年に共に講を終えている。大永七年（1527）十一月から実隆の内裏での古今集講義を引き継ぎ、享禄二年三月まで講じている。いわば父実隆の後継者の位置を得つつあった時期である。しかし、「実隆公記」を検する限り、公条の新古今集や百人一首の講説の兆候は認められない。

こうした状況のなかで宣賢は「新古今注」を「於坂本 自上冷泉家借得之云」というごとく、当時坂本に逗留していた上冷泉為和から借り出して書写した。為和は前年大永七年二月、近江に奔っていた將軍義晴の許を追って参陣し、義晴に従って東坂本に進み、十月越前勢の応援を得て入京、越年。翌大永八年（享禄元）五月義晴に従って近江坂本に奔る。享禄三年も為和は坂本に居たらしく、井上氏は宣賢が為和から「新古今注」を借り出したのは、為和が坂本に居た享禄二・三年であったとされた。宣賢側から前述したごとく享禄二年二月十日から四月の書写と限定されるのである。動乱期に辛じて借り出すことの出来た事情を「これを借り得たり」と奥書に記したと云うべきであろう。ところで既に見たごとく宣賢書写の「新古今注」は第二類本「新古今和歌集抄」の存在からも明らかのように両本ともに完本ではなく、その抜書本であり、特に「新古今注」は誤写多く、かつ空白は虫損と思われる、決して良い本ではなかった。にも拘らず、一字一句忠実に書写し、虫損箇所を空白にするなど厳密な書写態度を持っていることは、宣賢が本書に古鈔本として価値を高く評価していた証拠ではなかったろうか。仮に本書が三条西家の注釈書であったならば、上述したごとく宣賢と三条西家との密接な関係からみて、完本を借り出せばよかった筈である。こうして「新古今注」は三条西家の注釈書ではなく、上冷泉家伝来の注釈書であったと考えるのである。

それでは、冷泉家と百人一首注との関わりをどう考えたらよいのか。百人一首は二条家で尊重され、冷泉家ではせいぜい百人秀歌との関わりが問題とされるのが通説だからである。しかし、「龍吟明訣抄」<sup>16)</sup>序文には為家・為相



の説を伝えたらしい冷泉為綱（上冷泉為清男、寛文四・1664—享保七・1722）自筆「百人一首家伝抄三巻の名が見え、また、為秀周辺の関与が推測されている「米沢本百人一首抄」<sup>(17)</sup>がある。

「春過ぎて」の歌注は、

首夏の歌也。此山むかし天女下りてつねに衣をほす所也。夏をむかへて、此山の其女の体を云也。ここに耳櫓明神あり。無実とただすと云々。是にて、ほのぼのと春こそ空に来にけらしあまのかぐやま霞たなびく

である。ここで注目されるのは、衣を干すに關して「ここに耳櫓（甘櫓カ）明神あり。無実をただすと云々。」とあることで、これは磐斎「百人一首増註」が指摘するごとく、「詞林采葉抄」第三、天香具山の、

此山ニ衣ヲホスナド云事、甘櫓ノ明神トテオハスルハ、人ノトガノ虚実ヲタダシ玉フ神ニテ、ソノ衣ヲ神水ニヌラシテホスト申伝タリ。

によるもので、天理図書館永祿七年写本「百人一首聞書」<sup>(18)</sup>は今川了俊講釈聞書の伝来を持つ本であるが、ここでも「春過ぎて」の歌注で、

是は新古今集に夏のはじめの歌也。先春過ぎて夏くると云事めづらしからざることく也。然ば作者はここを粉骨に沈吟する也。春過ぬればやく夏の気色見ゆる由也。心は先底にやすみをこめたる歌也。春の程は霞たなびきて峯に衣をほすも見えず。夏きたりて霞はれ峯しろくくと衣ほすも見えたればさては山も更衣をほしたるか云心也。白妙は衣の枕詞衣の本色也。夫も昔は此山に天人くだりて衣ほしけるためしあり。如此思よれる也。而ニ此衣ほすとは何を山の衣がへといふと見るに白雲を山の衣とせり。春は偏ニ霞と見しを夏は人も更衣をする時分なれば山も白雲のころもをかゆるといふ分也。惣の心は四季にをしうつり先天地のよく知事をいへり。さて此歌の心をもて定家更衣の歌、大井河かわらぬ埜をのれさへ夏きにけりと衣ほすらし これも衣はなし。波のしろきを埜の更衣と讀なせり。又一説世に無矢をおふ人天香久山にして雨ハ、カノ木に衣をかけて

ほすに科ある人は七日まではす。とがなき人は聴ひる也。されば此歌は此衣をほすも春は霞見え夏は霞なければ此衣しろくともゆると云分也。うらなひの時生くる鹿をとらへて此は、かの木をくわせてかたのかわをはぎ焼てうらなふやうあり。かたぬく鹿といふ事は是より始也。此心を、香久山のは、かのしたにうら向てかたぬく鹿の妻やこふらんとよめり。但此恋は人の好所にあるべし。猶以前の後干要なるべし。

とあつて、一説として「米沢本百人一首抄」に萌芽のみえた「河社」の難儀と結んだ解釈を「世に無矢をおふ人天香久山にして雨ハ、カノ木に衣をかけてほすに科ある人は七日まではす。とがなき人は聴ひる也。」と「川やしろ」の歌と結んだ説を述べている。「川やしろ」の歌と結んだ解釈は二条家流にはなく、おそらく冷泉家に発したもので、「新古今注」作者の書いた百人一首注は「米沢本百人一首抄」と一説とする天理図書館「百人一首聞書」の中間に位置する性格を持つと考えられ、そうすれば公条の「百人一首聞書」はあるいは二条家宗祇流に冷泉家流を加えた注釈であつたと云えるかも知れない。

「新古今注」の成立について手懸かりとなるものはないのであろうか。前述のごとく「新古今注」は「手向草」の解釈に仙覺「万葉集註釈」の「松の苔」説をとり、さらに「古今ノ物名ノ所ニサガリゴケトヨメル、即コレナルヲヤ。」とあるところから「毘沙門堂古今集注」などにみえる「ニハサルヲガセト云者アリ。ヒカゲ草此也。」とあるのを採つて「手向草トハ、松ノ枝ナドニナガクサガリタル苔也。世俗ニハサルヲガセトイフ也。古今ノ大事也。可秘云々。」としたと思われる。ところが、一条兼良（応永九・1407—文明一三・1481）は「歌林良材集」巻下・「浜松が枝の手向草事」の項で、

白波の浜松がえの手向草いく代までにか年の経ぬらん

右、手向草はただ手向といはむと也。松をも結び、又時に随て花もみちをも折て手向といふ也。

と述べている。歌人で鎌倉・南北朝期の注釈にも通じていたと思われる「新古今注」作者の講説が「歌林良材集」

流布以後であつたら「松の苔」の主張はなかつた可能性があると考えれば、「新古今注」の成立は「歌林良材集」(本書の成立は不明。兼良没年の文明一三年以前。)以前ということになる。宣賢書写の「新古今注」の形態からも妥当であろう。明確な成立年代も作者も不明であるが、為秀以後の冷泉流の新古今注釈を伝えた書と思われるのである。

しかし、右のように推論したとしても疑問が残る。前述したごとく幽齋は「新古今注」と「新古今集聞書」(牧野文庫本)を主要な典拠注として「新古今和歌集註」を作成し、常縁「原撰本新古今集聞書」を中心に「増補本新古今集聞書」を作成したが、二条家歌学継承者としての幽齋に「新古今和歌集註」作成時、冷泉家流の注である「新古今注」を使用することに抵抗はなかつたのであろうか。

もっとも、室町末期二条・冷泉の対立はすでに意味を持たなくなっており、「新古今注」と共に「新古今和歌集註」の主要注である「新古今集聞書」は兼載「新古今拔書抄」や長珊「新古今抄出聞書」との関連が深く、かつ二条家とは関わりのない連歌師の注と思われ、幽齋は必ずしも二条家注に拘つてはいない。また、幽齋晩年の「和歌座右」はいろは順の和歌注釈書であるが、内容は「万葉抄出百首」「原撰本新古今集聞書」「宗長秘歌抄」「拾遺愚草抄出聞書」「堀河百首」「永久四年百首」「三体和歌」注や小町・公任・定家・家隆・慈円とともに冷泉歌人である正徹・正広の詠歌注をも抄出していることによってその傾向を知るのである。こうしてみれば「増補本新古今集聞書」跋に常縁「原撰本聞書」奥書を記して「此集之抄出右之奥書本写之。尤可謂秘藏而歌数不幾首漏脱多之。仍年来聞置之義等今加之、分而為上下。雖似有其恐所記非愚意之僻案。是以惠雲院殿近衛太閤、三光院殿<sup>三条西前内府</sup>等之御説述卑詞者也。」と実際には「新古今和歌集註」によって増補したに拘らず近衛植家、三条西実枝の名を記したのは従来通り二条家道統を継いだ意識の強調と考えざるを得ない。

## 注

- (1) 古典文庫「詞源略注」(昭59・7)解説。
- (2) 「新古今集古注集成 中世古注編1」(笠間書院・平9刊)「連歌聞書」解説。
- (3) 「新古今和歌集の研究」(星野書店・昭19刊)所収「新古今和歌集注釈書の話」
- (4) 「新古今秀古注集成 中世古注編1」(笠間書院・平9刊)「新古今注」解説。
- (5) 樋口芳麻呂編「王朝和歌と史的展開」(笠間書院・平・9刊)所収、拙稿「新古今和歌集註は幽斎の抄か」
- (6) 上原作和(「爛柯」の物語史)「斧の柄朽つ」る物語の主題生成―(講座平安文学論究 第十二輯・風間書房・平9刊)。
- (7) 田中幹子「斧の朽ちし王質」が「七世の孫に会ふ」―漢故事の変容の諸相―(就実語文・第一九号・平10・12)。
- (8) 「和漢朗詠集諸注集成1」(大学堂書店・平9刊)「永洛注」解説。
- (9) 片桐洋一「中世古今集注釈書解題二」(赤尾照文堂・昭48刊)
- (10) 万葉集叢書 第十輯「万葉集叢刊中世編」(詞林采葉抄)(臨川書店・昭52刊)
- (11) 大西美穂「手向草について―「新古今注」を中心に―」(吉田弥寿夫先生古稀記念論集・平11刊)
- (12) 万葉集叢書 第八輯「仙覚全集」(臨川書店・昭52刊)
- (13) 「内閣文庫本新古今聞書について」(和歌文学の伝統)角川書店・平9刊)所収。
- (14) 上条彰次氏の御教示による。
- (15) 赤瀬知子「京都大学中院文庫本 百人一首聞書」(百人一首注釈書叢刊2・和泉書院・平7刊)
- (16) 「中世歌壇史の研究 室町後期」改訂新版(明治書院・昭62刊)第三章。
- (17) 島津忠夫・田島智子「龍吟明訣抄」(百人一首注釈書叢刊11・和泉書院・平8刊)
- (18) 「米沢本 百人一首抄 解説と注釈」(米沢古文書研究会・昭51刊)
- (19) 長谷完治「天理図書館蔵 百人一首聞書」(百人一首注釈書叢刊2・和泉書院・平7刊)